◎琉球新報　2016年05月08日　朝刊32面　記事数：1/1　<1/1枚>
希望この手に　沖縄の貧困・子どものいま＝第３部（６）　子育て応援隊ＮＰＯいっぽ　入浴や遊び相手も

希望この手に
沖縄の貧困・子どものいま

第3部 ⑥

若い親に寄り添う

入浴や遊び相手も

子育て応援隊 NPOいっぽ

ミーティングする子育て応援隊NPOいっぽの職員たち。会議を毎週開き、支援家庭の情報を共有する＝糸満市摩文仁プラザすこやか館

「『困ったことない？』って、いつも声を掛けられていた。うるさい人だと思っていたけど、本当に困った時に思い出した」。15歳で子どもを産んだ女性（24）＝糸満市＝は、同市の「子育て応援隊NPOいっぽ」に支援を頼んだ時のことを振り返る。

子の父親だった彼氏は、生活費など一切出さず、出産から半年ほどで別れた。母と協力して子どもを育て、その後、結婚して第2子を産んだ。母から離れ、2人の子の親になった時に初めて育児の大変さを自覚した。頭に浮かんだのは、しつこいほど声を掛けてきた「いっぽ」副会長の玉城米子さんだった。

上の子を産んだ当時、女性はまだ遊びたい盛りだった。幼い子を母に預け、夜も友人と出歩いた。「友だちが集まっているのに、自分だけ行けないのが嫌だった。育児放棄の状態だった」と振り返る。

そんな中、玉城さんに出会った。子どもの保育園を訪ねてきた玉城さんに「困っていることはないか」と声を掛けられ、連絡先を渡された。玉城さんは会うたびに声を掛けてきた。女性は「お迎えの時に見掛けると、またあの人がいるって思った」と苦笑いする。当時は、声を掛けられる理由が理解できなかった。

結婚し、2人目を産んだ3年前、女性は助けが必要になった。「最初の育児は母に任せていたから、2人目ができて、どう対応していいのか分からなかった」。上の子の遊び相手、下の子の夜泣きの対応にうろたえた。以前と異なり、離れて暮らし、仕事も始めた母には頼れなかった。頭に浮かんだのが玉城さんだった。

玉城さんからもらった連絡先のメモを探し出して連絡し、子どもへの接し方、遊び方などを教わった。次第に、相談相手として信頼を寄せるようになった。就労を希望して、同会の職業訓練に参加。調理実習、小物作り教室と活動を広げた。料理に興味を持ち、紹介された保育所で調理の仕事に就いた。

今でも週1回の訪問を受けている。支援員が子どもと遊んだり、勉強を見たりする。

「おばあちゃんみたい」と、小学3年になった上の子は話す。女性は「話を聞いてもらえることがうれしいようで、私にいっぱい話してくれる」と目を細めた。

◇　◇

「時間をかけて状況を把握すると、少しずつ困り事を話してくれるようになる」と玉城さんは話す。若い母親をはじめ、DV（ドメスティックバイオレンス）被害や親に疾病がある家庭など、市内の10世帯ほどを支援する同会のモットーは「きめ細やか」だ。支援は保育園への送迎、乳児の抱っこや入浴、子どもの遊び相手、みそ汁の作り方など。決まったメニューはなく、何に困っているのかを聞いて、内容を決める。

生活困窮家庭が多く、利用料は取らない。一方で、「無料」に頼り切らないよう注意する。必要に応じて有料支援を提供する機関を紹介する。時間をかけて促しながら自立できるようにしている」と制度についても情報提供する。

活動を始めて5年。見えてきたのは、困難を抱える家庭を早期に発見することの重要性だ。本年度は、育児に関する悩み相談に力を入れ、相談会を定期的に開く予定だ。玉城さんは「母親に自信を持たせたい。これで十分という支援はなく、日々迷っている。きめ細かい支援をできる場が地域ごとにあればいい」と支援の広がりに期待を込めた。

（子どもの貧困取材班）

情報やご意見をお寄せください。
文化部生活班 ☎098(865)5162　社会部 ☎(865)5158
seikatu@ryukyushimpo.co.jp
FB「チームいしがんとう」で発信中